

18春闘の過ちを教訓とした「新生JR東労組運動」の前進を拒む

分裂策動に対する見解

JR東労組は18春闘のたたかいにより、組合員の大量脱退による組織力の低下を余儀なくされた。組織存亡の危機の中、18春闘のたたかいを猛省し、組合員の声を真摯に受け止める労働組合として組合員は勿論、JR東労組を去っていった仲間にも再度認めてもらうべく新たな運動を進めてきた。

そのような中で、12地本が心をついにし、共に進むことが何より必要であることは言うまでもない。しかし、18春闘の見解相違に端を発した組織内での対立による混乱は、組合員やJR東労組を去った仲間から「まだそんなことをしているのか」「東労組は何も変わっていない」という数多くの苦言を浴びている。組織再生の足枷になっていたことを今一度振り返り反省するべきである。

新潟地方本部は過去に大きな組織分裂を二度経験してきた。その苦しいたたかいの過程において、心ある仲間と共に分裂を乗り越え組織の再建、強化を図ってきた。この時の並々ならぬ苦労はこれからも消え去ることはいらぬだろう。

今でも、その経験を全組合員と共有し続けている。だからこそ、一枚岩の団結の必要性を訴えてきたのである。真にJR東労組が生まれ変わり、運動を進めていくのであれば、他人事のような分析も自らを擁護する総括も、一方通行の運動方針も必要ない。我々全員が「負けを認める強さ」とゼロからのスタートだという「覚悟」が必要だ。

立ち止まっている暇も、争っている暇もない。新潟地方本部はそうにして分裂を乗り越えてきた。この組織再生に重要な時期に、水戸・東京・八王子の職場では、職場集会で分裂を提起され、「JR東労組に残るのか」、「分裂組織に行くのか」、「組合を辞めるのか」の選択を迫る分裂策動が行われ、分裂への不安や混乱の声が中央本部に届いている。

新潟地方本部は過去に経験した二度の組織分裂のように、賛同することを強いて組合員を引き回し、自らの主義主張が通らないからと言って組織を分裂させ、意のままになる組織を目指す分裂策動を許すことはできない。

この先、会社との対立だけを目指す運動ではなく、会社の発展から生み出される労働条件向上を目指し、新生JR東労組に対する分裂策動を許さないたたかいをつくりだしていく決意を持ち見解とする。

2020年1月26日
東日本所客鉄道労働組合
新潟地方本部執行委員会